

論文の内容の要旨

論文題目 近世日本社会と儒教

氏名 黒住 真

本論文は、江戸時代を中心とする日本における儒教思想について、その社会的な性質と思想の特徴とを総合的に明らかにしたものである。第一部「近世社会の儒教」では、近世儒教思想の性格を他の思想文化との関連を視野に入れながら構造的に位置づけ、またその歴史的な流れを大づかみに描き出す。第二部「伊藤仁斎」・第三部「荻生徂徠」は、近世日本の代表的な儒教思想家である仁斎・徂徠の思想について立ち入ってテキスト分析をおこない、その思想の倫理・政治的様相を描出するとともに、併せて日本の儒教思想の典型的特徴を浮き彫りにする。

第一部、「徳川前期儒教の性格」。日本では、儒教について、諸々の関連文物は比較的早く受容されるが、その道徳的本質は定着に遅れがあるとされる。その傾向は、じつは儒教祭祀・科擧の欠如と関連があり、それが徳川儒教の非原理主義的で複合的なあり方となって展開している。さらに主要な儒教思想家たちが朱子学によって骨組を与えられながらも他の諸文化要素に習合していく有り様を描き出し、そこから実用主義的傾向や全体・共同性への帰順の倫理が生まれつつ、やがて日本論や日本神話と結合していく、とする。こうした儒教の複合的性格の解明を、「儒学と近世日本社会」「近世日本思想史における仏教の位置」では、さらに政治社会との関連で深める。近世の儒者・儒教は、すでに充実していた神仏の宗教複合の後に加わった新参与者であり、政治システムの中核にも十分位置づかなかった。しかし、それゆえに神道的な正統性と習合して発展し

た。また仏教は、近世の思想宗教複合の外部的な守りの部分を占めていた、とする。儒教をめぐるこのような諸思想の複合は、近世後期に向けて社会的な定着と統合の度を高めた。

以上の儒教の複合性と後期に向けての拡充という議論は、研究史的には、儒教の初期イデオロギー的特権性と古学・国学による後期に向けてのその否定という丸山真男氏の徳川思想史論に対立する。「徳川儒教と明治におけるその再編」では、その点を吟味しつつ、儒教のイデオロギー機能は神道的伝統との結合にあり、それは否定されるのではなく、むしろ明治になって完成したこと、このイデオロギー形成は儒教研究のアカデミズムの析出を伴っていること、を指摘する。さらに、このような儒教の在り方は、古代以来の漢学の日本文化やその言語使用におけるシンクレティズムと関連するものとして、ひろく通観することができる（「漢学——その書記・生成・権威」）。

そうした近世儒教思想の流れの中にあって、仁斎・徂徠は、儒教古典テキストにもとづく本格的な経学者として典型的な位置を占める。その経学の構築は、じつは当時の世間を背景にした思想創造でもあった。仁斎は元禄期京都での町人の文化と人倫、徂徠は元禄後江戸の政治的社会的変動を扱う思想であった、とする（「儒学の体系化——仁斎・徂徠の思想構築」）。

第二部では、伊藤仁斎の道德論の内部に立ち入る。仁斎において道德は、朱子学のような先天的な理によって基礎付けられるものではなく、人々の意志や行為によって形成される。そこで、仁斎の道德は、理ではなく徳行を中心に捉えられるとともに、道の顕現・隠蔽という歴史的ストーリーと孔子という主体像の強調によって位置づけられる（「伊藤仁斎の「道」」）。また、仁斎が道德を人間の営みのうちに定位させる背景には、世界観的なヴァイタリズム（活物観）があり、そして仁斎は、道德を歴史的に持続・蓄積されかつ天下に広がった公共的な実質としてとらえている。仁斎にとって、道德とは人間における生命的・日常生活的な相互作用やその認知であり、その否定を乗り越えようとする営みでもあった、とする（「伊藤仁斎の倫理」）。

荻生徂徠は、道をやはり人の営みとするが、仁斎よりいっそう人為的な構築物としとらえる。第三部の荻生徂徠論では、まず、徂徠でも仁斎同様、活物観があるがそれが神秘的不可知の様相を深めており、それと相俟って、世界を様々な主体的によって作為・構成された入れ子状の秩序として捉えていることを解明する（「活物的世界における聖人の道」）。そこにおいて構想された「道」の様態を、徂徠の政治国家構築論——礼楽等の制度構築および封建・郡県の国制論を中心に詳しく分析する（「徂徠学における「道」の様態」）。そのような徂徠の道は、自己と他者、人間組織など、各レベルにおいて、差異（多様性）を容れるものとして考えられており、それは徂徠の共同体空間からの出離とその対象化の経験に基づき、また彼の言語認識論からも来ていること、さらに生への畏敬感覚をも孕んでいること、を論証する（「荻生徂徠——差異の諸側面」）。

こうした多様性の把握とも相まって、徂徠は、その道を、理ではなく文学性・歴史性を中心にとらえ、それを体得すべき主体的キャパシティー（量）の拡大・包括化を学問だとした。「徂徠学の基底」では、この問題を学問＝主体形成論を軸に詳しく分析した。また、徂徠の主体論・人間

論は、(しばしばそうだとされるような、相克的・利己的な人間観ではなく)、相生的・共生的な人間観を基礎とするもので、それを伸ばすところに徂徠の社会(俗)・国家構築論がある、とする(「荻生徂徠の人間論に向けて」)。

最後に、このような徂徠学を形成史的に分析する。「初期徂徠の位相」では、徂徠学を押し出す所以となる、徂徠の出自・背後の物語をまず遡及する。これに加えて、共同体の認識枠の離脱(「クルワ」を出す)と世情への下降の体験が、初期徂徠のライトモチーフになって働いていることを指摘する。それは次いで徂徠の異言語理解論としての「訳学」となって発展するが、その根本文献である『訳文筌蹄』の従来十分明らかでなかったテキスト成立・文法的構成等をもさらに解明した(『訳文筌蹄』をめぐって)。

以上の仁斎・徂徠論は、最大の日本儒者に数え挙げられる伊藤仁斎・荻生徂徠について、その思想内容を詳細かつ包括的な把握したものである。従来の近世日本政治思想史では、徂徠らに自然に対する作為の論理があることが指摘されていた。それを半ば正しいが、しかし彼らは、決して機械論的な世界の住人でも、絶対的な主体の哲学を説いたものでもなく、天地人の「生」を感得しつつ道德を構成する思想家であることはしばしば見落とされていた。本論文は、その「生の思想」の側面に着目しつつ、仁斎・徂徠を多角的に明らかにした。

さらに、彼らを含む近世儒教の位置づけでは、朱子学的儒教の盛行とこれに対する徂徠の主体的作為思想による打倒という従来のストーリーに対して、他の諸思想・諸宗教の複合性の中における儒教の神道依存的な成長という構図を対置させた。近世後半に向けてまだ探求の余地が残るが、把握パラダイムを変換するという意義は持ち得たのではないかと考えている。